令和７年度
発達支援研修通信
～第２号～

発行者 ： 和光市保育センター

令和7年12月発行

講師：一般社団法人
プライムシャイン
代表理事　井上綾乃 先生

11月7日（金）に、市内の保育従事者向けに、第3回発達支援研修を開催しました。
今回のテーマは、『**保育士の想いと保護者の想いが違うとき…どうする？保護者支援**』について、井上先生にご講義をいただきました。
保育現場において、保育士は保護者にとって信頼できる理解者であり、保護者の思いに共感し寄り添いながら、子どものありのままの姿を受け止め、最善のサポートを共に考えていくことの大切さを改めて実感した研修でした。研修内容を以下にまとめてお知らせいたします。

発達の特性や障がいは、いつわかるの？

身体的や染色体等の障がいは検査等で早期診断に至る一方、自閉スペクトラム症など目に見えない障がいは確定の難しさがある。
⇒社会性が育ってくる時期（3～4歳頃）に気になり始めることが多く、何度も問診や視診を繰り返しながら経過を見つつ、診断に繋げる。

家族に必要な5段階（障がい受容の段階的モデル）

Ⅰ　ショック
障がいがあるかも…とショックを受ける

➡

Ⅱ　否認
障がいから目を背けて認めようとしない時期

➡

Ⅲ　悲しみと怒り混乱期
行き場のない怒り。他者に向けられることも

➡

Ⅳ　適応
何かのきっかけで障がいと向き合い、前に進もうと考え始める

➡

Ⅴ　再起
障がい受容し、自分には何が出来るだろうか実行する

保護者の気持ちを理解し、保護者が今、どの時期（段階）にいるのかを考えながら支援することが大事なんだね。

大事なことは…

見た目では分かりにくい障がいや発達特性のある方、また社会の中で少数派の方が安心して暮らせる社会をつくるためには、困っている人が『困っています。誰か助けて』と安心して言える環境であることが重要。

子どもの特性やライフステージに応じた環境によって、“障がい”は必ずしも固定的なものではなく、“個性”として発揮されることがある。
保育園では、自由あそびの時間にあそびを見つけられず、落ち着かない様子を見せたり他児に干渉していた子が、小学校では自席やカリキュラム・スケジュールが整っていることで、安定して過ごせるようになることもある。

保護者支援のポイント

保護者が自分のペースで障がいを受け止めていく過程に寄り添い、共に歩むことができたときに、信頼関係が築かれる。

子どもと関わる時は子どもファーストで！保護者と関わる時は保護者ファーストで！

保護者が何を求め、何を聞きたいのかを探し、信頼関係に繋げる。

サンドイッチ法

肯定と肯定の間に、課題となる面を挟んで伝えると、印象が大きく違うテクニック。

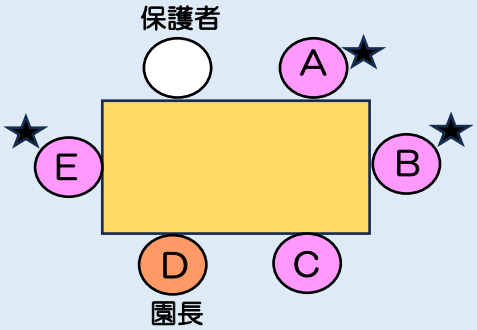
①できること

②できないこと（課題となっていること）

③サポートするとできること

今の様子や課題点を伝えつつ、「こうするとうまくできましたよ」を伝えることが大事。

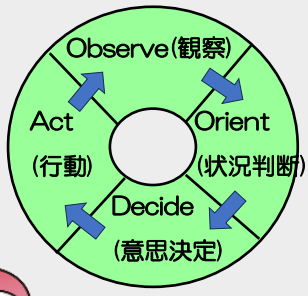
面談の座席の位置について



担任保育士が保護者から近い★（A、B、E）の席に座ることで、常に味方でいてくれるような安心感を持つことができる。
また、正面（D）は畏まるという意味合いで、園長先生が座ることが望ましい。

OODA（ウーダ）ループで保護者を支援する

- Observe（観察）…状況をよく見る。（表情・行動・言葉・環境を丁寧に観察）
- Orient（状況判断）…観察した情報を整理し、意味づける。（背景・気持ちを考える）
- Decide（意思決定）…どう対応するかを決める。（声かけ、環境調整、支援方法を選ぶ）
- Act（行動）…実際に対応する（実際に声をかける、支援を行う、環境を変える）



OODAループを使って、保護者支援のグループワークを行いました。事例の内容についてグループ間で話し合い、表にまとめながらアセスメントを行いました。「保育士個人ではなく、園全体で考える」「子どもの良いところから伝えていくことが大事」などの意見がでました。

まとめ

- 『この先生になら相談したい』と思われる存在になる。
- 子どもの様子を保護者に伝える際には、適切な相談機関や相談先を紹介し、次のステップへとつなげられるよう、事前に十分な情報を調べておけると良い。

参加者の声♪

職員同士での連携を密にし、1人ひとりの支援を行っていきたい。親の状況もアセスメントし、把握するとともに、職会などで OODA ループで話し合いを持ちたい。

（T 保育園　N 先生）

子どもの事は一旦切り離して考えるというのは斬新だった。“子どもの為に”を第一に考える事が多かったが、保護者ファーストを実際に行い、不安や悩みを打ち明けられるような関係作りを行っていきたい。

（H 保育園　I 先生）